

ケータイ小説のメディア論：ケータイ電話を使った執筆による声の残滓の再現への影響

著者名(日)	小坂 貴志
雑誌名	神田外語大学紀要
巻	23
ページ	1-26
発行年	2011-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000582/

ケータイ小説のメディア論

－ケータイ電話を使った執筆による声の残滓の再現への影響－

小坂 貴志

序

メディアという概念はきわめて広範囲に使用されており、中でも広く知られている用法として「マスメディア」として登場するマスコミ（ユニケーション）を表す用法がある。マスメディアは、情報発信者と受信者間のマスコミュニケーションを可能にするメディア技術をも含んだ広義、また報道機関という組織をさす狭義という2つの意味を持つが、いずれの場合でも、マスコミによる情報発信と存在そのものを可能ならしめるメディア技術は必要不可欠のものであることは指摘を待たない。

そして今や多岐に渡るコミュニケーション技術がユビキタス設計の元、我々の日常生活に入り込み、その影響により、我々のとるコミュニケーションの形態が変容を遂げ、コミュニケーションがとられる頻度やスタイルをはじめ、コミュニケーションを通じての認識形成、思考形態の変化までもが議論されるに至っている。技術はもはや人間とは切っても切り離せない関係にあり、コミュニケーション論の世界でも、コミュニケーション（と）技術という小分野が確立する¹につれ、技術が人間コミュニケーションに与える影響は研究上でも無視できないものになっている。

このように説明すると、コミュニケーション技術とは何か機械的かつ物理的な存在であるかのようにとらえられがちであるが、そもそも人類の長い歴史からすると、コンピューターに代表される技術はごく短くその一部でしかない。コンピューター発明の以前、さらに歴史をさかのぼって、人類がお

互いのコミュニケーションを可能にするための技術としての話し言葉、書き言葉といった基礎技術も我々のコミュニケーションを支援する上での重要なものである点は誰も否定することができないだろう。

これは、マスコミュニケーションという、情報配信技術を意識下においた狭義の世界では完全にとらえることができない人類の発達において、お互いの意思疎通をどのような「媒体」を通しておこなうか、として用いられるメディアである。この文脈で用いられるメディアは、「メディアはメッセージ」の金言で知られるマーシャル・マクルーハン²および彼の弟子であるウォルター・J・オングの『声の文化と文字の文化』³を中心にして広まったメディア論に発端を見てとることができ、いまだ一部の理解に留まっているように思われる。

本論は、人類の発明によるコミュニケーション技術でも、その長い歴史を通して人類と常に密接な関係にあったメディアに関する小論である。具体的なケースとして、最近の発明であるケータイ⁴小説をとりあげ、ともすると技術面かつ表面的なスタイルの違いに議論が終始しがちであるケータイ・コミュニケーション分析からは一歩引いて、技術決定主義に極めて近いものの、声こそ人間コミュニケーションの中心性があるとする、人類の歴史を言語の進展という観点から論じたウォルター・J・オングの研究を参考にする。オングの説く、声の文化、文字の文化を経て二次的ではあるにせよ声の文化へと回帰した現象、そしてますます高まる声性とも呼べる声の残滓は、人間コミュニケーションを人類の言語発達を中心に見た際、声の中心性を裏付けるものであり、第二の声の文化の先端に行く日本のコミュニケーション環境においては特に研究の価値があるものと本論では主張する。

オングの声の文化、文字の文化

人類はその歴史の中で多くの文化を生み出してきた。コミュニケーション

というお互いの意思疎通を図るために発明された文化の一例をあげるとすれば、話される言葉および書かれる言葉がもっとも重要な文化的発明であると指摘することができる。言葉（文字）そのものがなければ、口頭文字を使用する際、お互いに効果的な意思疎通はできず、書面文字がなければ、お互いのやりとりがどのような軌跡をたどったかを記録する術を持たなくなる。文字は人間の生活そのものを支え、人類のあり方にも少なからず影響を及ぼし続けている。

ウォルター・J・オング（1991）は、人類の歴史を「声の文化」および「文字の文化」の拮抗関係にとらえ、さまざまな種類の文字がいかにかに人間の思考に影響を与えてきたかを論じ、これまで人間が創り上げてきた文化を、声の文化、文字の文化、第二の声の文化の三つに分類している。声の文化とは、書き言葉を持たない集団による思考パターンによって築きあげられるもの、文字の文化とは文字（そして印刷術）が発明されその力によって情報普及の過程に以前とは異なる道筋がつけられたもの、そして、第二の声の文化とは、いわゆる電話、電子メールといった電子コミュニケーションに影響を受けた思考形態である。

声の文化の認識的特徴

オングは、これら3つの文化進展それぞれに対して認識面での特徴的な形態を人類が有しており、「心理的力学」という言葉でその概念を言い表している。第二の声の文化の段階にある私たちには想像することさえ不可能である点は指摘を待たないのだが、書き言葉を持たない以前の文明は、その特徴として、(1) 累加的 (additive rather than subordinative⁵)、(2) 累積的 (aggregative rather than analytic)、(3) 冗長 (redundant or 'copious')、(4) 保守的 (conservative or traditionalist)、(5) 生活世界への密着 (close to human lifeworld)、(6) 格技的なトーン (agonistically toned)、(7) 参加的 (emphatic and participatory

rather than objectively distanced)、(8) 恒常性維持的 (homeostatic)、(9) 状況依存的である (situational rather than abstract)、という以上九つをあげている。オングは著書の中で上記の順序で説明をおこなっているが、本論では、表現スタイルとして (1) 累加的、(2) 累積的、(3) 冗長、(6) 格技的なトーン、(9) 状況依存的、(7) 参加的、感情移入的、価値観として (4) 保守的、(5) 生活世界への密着、(8) 恒常性維持的の2つに大別し、以降順を追って説明する。

声の文化の表現スタイル

表現スタイルとしての累加的とは、ある文書が複合文ではなく短文 (単文) の連続により構成される状態をさす。短文が連続する場合、等位接続詞「そして」(and) が文章の冒頭に配置されることが多い。オングは、声の文化の特徴が見られる『ドゥエー版聖書』(1610) と『ニュー・アメリカン・バイブル』(1970) を比較し、前者における等位接続詞の使用頻度の高さを指摘している。文字を持たない人にとって、長い文章をまとめるのは記憶がつかない恐れがある。そのため、できるだけ短文で、しかも単文に考えをまとめている形式が用いられたことは理に適っている。

累積的とは分析的と対比できる考え方である。状況・場面を描写するときなど、対象となる事物の実態を把握しそれを言葉で表現するのではなく、慣用的に形容してしまう認識方法である。オングは、昔話の例をとりあげ累積的認識を説明している。昔話に登場する「王女」は単なる「王女」ではなく必ず「美しい王女」、「樫の木」ではなく必ず「頑丈な樫の木」(Ibid., 86、筆者下線) となっている。このように現実とは乖離しているおそれがあるが、これまで使用されてきた表現を慣用的に、かつ非分析的に借用することを問題としない認識である。

冗長は、同じ内容や表現を不要に繰り返すことである。繰り返すというこ

とで、文字の力を借りずに記憶の中に内容を留めるという効果をもたらす。講演を頼まれ、その講演内容が冊子にまとまるような場合がある。自分の講演内容をまとめたトランスクリプトを読んで驚きの声をあげたことがあるかもしれない。不完全な文章、話題の頻繁な展開、そして同じ内容を繰り返して述べている。これには個人差があるが、声による発表は冗長さが増すのは日頃我々が経験していることであろう。

格技的なトーンは、コミュニケーションのスタイルが非常に闘争的な言い方に基づくものとしている。格技的なトーンが発展した極端な例として、物語の描写が頻繁に見られる戦闘的で暴力的なシーンの使用があげられる。こういったシーンを使うことで聴衆の記憶に残るという効果から、声の文化では多用されたのも理解できる。文字の文化と比較して、声の文化では参加的であるとされる。書くという行為は書き手を通常他の人間から遠ざけ孤独になることを強い、文字そのものは書き手から独立したところで読み手の目に入る。声は人を近づけるが文字は人を引き離す。

発話が時を超え、空間を離れて言及されることが少なく、自分の身の回りのものに影響されやすいので、状況に依存する度合いが高い。抽象的な概念は存在しにくく、「木」といえば目の前にある「木」であって、世界に存在する樹木を総じて称する概念的な木についての言及はない。オングはこの特徴を称して状況依存的と言っている。

声の文化の価値観

表現スタイルと密接に関係しているが、本論では価値観としてみなす保守的ないし伝統主義的という特徴がある。声の文化では、何かを記憶に残すという作業が重要になるため、記憶の総量が比較的多い年長者になればなるほど権威を持つようになる。別な言い方をすれば、過去の知的資産や伝統を重んずる態度が形成される。また、世情が不安になる際、暗記（暗誦）による

教育が盛んになるという（オング、1991）。これは、デフレ期にあった日本で国語に対する見直しが提言され、その中でも音読の効果がとても高い評価を受けたのは誰の記憶にも新しいだろう。まさに、音読による教育は保守的で伝統主義的なものの見方を促進し、かつ国民の中に統一的な見解を植えつけるためには効果的な方法である。

別の価値観として、声の文化では生活世界へ密着しているため、表現という形で表されるものが常に日常生活に関連付けておこなわれる。オングがあげる例はマニュアル（使用説明書）である（Ibid.）。マニュアルそのものが文字の文化の成果ではあるが、声の文化ではマニュアルに相当し、何かを達成させるためにある一定の手続きを踏むという知識を体系化することがおこなわれない。これにしても、日本社会の中でマニュアルを非難する声があげられるのは特筆に価しよう。原子炉におけるマニュアル無視が起こした事故、どこのファミリーレストランに行っても同じあいさつを受け、似たような対応がされる。これは声の文化には到底見られない行動パターンであり、文字がなした社会的行動の典型例である。

恒常性維持的とは、現在に生きることを意味する。過去の記憶を長らく保持できず、よって発話は常に現在をスタート地点として、そこから意味づけをおこなう。オングは辞書の例をあげ、ある語に対していかに多くの意味が登録されるかで意味の均衡がとれなくなっているとする（Ibid.）。声の文化では、このような言語の在庫がないため、相矛盾する意味がひとつの語に複数登録されることはない。

文字の文化から第二の声の文化の認識的特徴

文字の文化では、声の文化に特徴的だった上記の思考形態から、文字の力により少なくとも影響を受け、文字そのものの使用さらに印刷技術の活用により、独自の思考形態、情報の伝播形態が創り上げられる基盤ができあがっ

た。そして現在、われわれ現代人は、オングの称する第二の声の文化に突入しており、多くの状況・場面において電子コミュニケーションによる恩恵を被っている。そこでは、文字の文化がさらに進行するのではなく、思考形態という観点からみると、むしろ声の文化への回帰が見られるとし、オングはすでに紹介した第二の声の文化という概念を導入した⁶。

声の文化、文字の文化、そして第二の声の文化と人類の言語使用形態の移り変わりを分類したオングは、第二の声の文化として電子コミュニケーションによる認識をとりあげている。現在の日本をはじめとする先進国では、ラジオ、TV以降、電子コミュニケーションが蔓延しており、日本では特にケータイ電話の使用がその特徴となっている。

オングは、第二の声の文化は、声の文化への回帰であるとして、いくつかの特徴的な類似を挙げている。その特徴として、「そのなかに人びとが参加して一体化するという神秘性を持ち、共有的な感覚をはぐくみ、現在の瞬間を重んじ、さらには、きまり文句を用いさえするのである」（オング、1991年、279ページ）と説明している。ただ、第二の声の文化は上記のとおり、書き言葉を持たなかった頃の文化である声の文化に似て非なるものであることがオングによって指摘されている。「人びとが参加して一体化する」に関しては、声の文化と第二の声の文化では、参加者人数に大きな開きがある。声の文化では声が聞こえる範囲内、つまり声の届く範囲に集まれる人数なのに対し、第二の声の文化では不特定多数の参加者が期待できる。そのため、同時期に同じコミュニケーションに参加しているのだが、実際にはそのすべてが発言の機会を同じく持つかというところではないため、オングはこれを「神秘性をもつ」と表現した。また、時代的背景も手伝って、オングの言う電子コミュニケーションとは、その大半がテレビやラジオのマスコミュニケーションであることは想像に難くない。

声の文化への回帰

本論では、オングの説いたメディア論を踏まえて、現代社会のコミュニケーションを眺めてみるが、その中でも第二の声の文化といわれるものが、いかに声の文化への回帰を果たしたかを論ずる。具体的な事象として本論ではケータイ・コミュニケーションをとりあげるが、とりわけケータイを利用して物語を著作し、ケータイを利用して読書する「ケータイ小説」を題材とする。第二の声の文化としての声の文化への回帰とはまた一風異なる分析をすべく、ケータイが提供してくれる機能の中でも、特に書く機能について分析をしていく。

ケータイ小説

ケータイは日本をはじめ、世界におけるコミュニケーションを支えるバックボーンと考えられるまでに急成長を遂げた。発展には長短兼ね備えた両面がつかまとい、オレオレ詐欺を代表とする詐欺事件や出会い系、ワンギリなど、犯罪を誘発させるおそれのある数々の行為が、ケータイの社会浸透を背景としてなりたっている点は指摘できる。一方、災害や緊急時の緊急連絡、ライフラインとなりえるため、ケータイは善悪の両側面からわたしたちの社会生活に影響を及ぼしている。良い意味でも悪い意味でも、われわれ現代人はケータイとは切っても切れない関係を持ち、高度に発展したコミュニケーション機能を享受し、研究面でも様々な観点からの考察がおこなわれている⁷。

ケータイ小説は極めて最近の現象であり、当然のことながらケータイ電話の登場がその前提となっている。ケータイ電話の普及がほぼ1億台に到達しようとする⁸ 現在だからこそ、これほどまでにケータイ小説の人気の高まったとしても過言ではない。それがゆえにいわゆる「ケータイ」小説という名が付けられ、今や小説分野のひとつのジャンルとみなしても不思議ではないが、ケータイ小説の特長を分析し、そもそもケータイ小説は文学であるかな

どのジャンル議論も巻き起こっている（石原、2008；伊東、2008；杉浦由美子、2008；速水、2008；本田、2008；吉田、2008）。

ケータイ小説配信サイト「魔法の図書館」では、タイトル数70万ものケータイ小説が購読でき、検索機能を使えば、好きなジャンル、作家、読むための所要時間をキーワードにして、お好みのケータイ小説を検索することができる。既存のケータイ小説は携帯電話のメディアだけに留まらず、従来のペーパー小説⁹として書籍化されるケースが増えている。「魔法の図書館」から書籍化された作品は2007年3月現在18にのぼっている。ケータイというメディア、ケータイ小説、書籍化というマルチメディア化により利便性と購読者数が急激に増加している。本論では「魔法の図書館」で配信され人気を呼んだ作品のうち『赤い糸』（メイ著、ゴマブックス）をとりあげる¹⁰。

ペーパー小説としての既存の文学と対比される形で、ケータイ小説の特徴をまとめてみた。

表1 ケータイ小説の特徴

項目	ペーパー小説	ケータイ小説
印字方向	縦書き	横書き
著者	作家（著名）	素人（無名）
調子	叙述体	独白、会話体
語彙	豊富	乏しい
販売チャネル	書店	ビデオ店、コンビニ
読者層	広範囲	10～30代（女性多）
情景描写	複雑	シンプル
登場人物	多い	4人以内

表示	900字(単行本)、600字(文庫本) 1ページあたり	100字程度 (1画面)
文章	複文	短文、単文
改行	段落単位	50～100字以内
主人公	様々	感情移入しやすい
テーマほか	豊富 奇想天外 パターン創出	悲劇(叶わない恋、恋人の死) 刺激的(レイプ、妊娠中絶) ワンパターンな結末 シナリオや漫画に近い

詳細については後述するが、ここで特記すべきは著者も小説の素人だという点であろう。既存の文芸批評界はケータイ小説に対して冷たい眼差しを向け、ケータイ小説に共通する特徴を踏まえ、「これは文学ではない」と結論付けている。現在のところ、批評家らが声を揃えてケータイ文学否定論を唱えている。表面的な表現に関して分析をおこなわずとも、これが文学か、なぜこれがベストセラーかと嘆きの声があがるのもある程度同意することができる。まさに稚拙という形容があてはまるし、いわば、おしゃべり風の書き物が文学に位置づけられるのを嫌うのも当然のことであろう。

議論の余地が残されるのは、ケータイ小説を既存の文芸論の枠組みの中でだけ論ずるべきかということである。そして、本論での論理的な帰結点は、まずケータイが既存の文芸の中ではとりあげられない形態の異なる作品群であるとする考えである。鈴木(2007)は、ケータイ小説を文学ではないとする批評を真っ向から否定し、ケータイ小説を文学とみなすことへの必要性を却下している。ケータイ小説を文学の範疇で考えるのではなく、別の位置づけを与えているのである。その別の位置づけとは「前近代社会において口から口へと伝えられていた民俗説話に近いもの」であるとして、「デジタルな

民俗説話」という新たな枠組みでケータイ小説をとらえようとしている。本論では、鈴木が説いた「デジタルな民俗説話」に対する実データを提供するのがひとつの目的でもある。

このような捉え方はまさしく本論のテーマである第二の声の文化が、声の文化への回帰を果たしていることへの証左であり、ケータイ電話というコミュニケーション技術が我々人類の一部、つまりケータイ・コミュニケーションの恩恵を被っている集団が、ケータイ小説という形にて発話がおこなわれる際に人間が認識していく形態が新たに生まれ出ている。

ここで有意義な議論としてあげられるのは、第二の声の文化の特徴としてではなく、声の文化つまり文字を持たない文化に見られる認識方法とケータイ小説を比較することではないだろうか。すでに鈴木が述べているように、ケータイ小説の特徴は第二の声の文化の特徴を際立たせるのではなく、声の文化そのものへの回帰を果たしていると言ってもよいほど、声の文化の影響を受けた形となっている。

ここで誤解してはならないのは、すでに文字の影響を受けた文化は完全に声の文化へは逆行できないことである。だが、現代の日本社会は原始的なものへ回帰を遂げていると危惧する声もあがっている¹¹。一方、ケータイ小説における動きは新たなジャンルの登場という意味では嘆くべき現象ではなく、社会に見られる若者の文字離れを解消する動きとしてはむしろ歓迎すべきだろう。以降、「デジタルな民俗説話」としてのケータイ小説分析を展開する目的で、ケータイ小説の特徴を、声の文化の認識形態と照らし合わせながら論じていく。

記憶に相当するケータイ機能

その前にケータイを機能的な面から分類してみると、オングの論じた声の文化と文字の文化が混在していることがあげられる。まず、声の文化として

は第二の声の文化の特徴である電子メディアを介在しての口頭コミュニケーションである。これはケータイの基本的な使用方法であり、当初の使用目的からしても、モバイル電話としての役割を担っている。次に、文字の文化を髣髴とさせる使用法としてケータイメールがあげられる。コミュニケーション上の制約、さらに異なるコミュニケーションモードへの需要から生まれたケータイメールだが、今では使用の位置付けとして非常に重要であることは説明を待たない。

ケータイメールを論ずるにはやはり物理構造的な制約を考慮に入れる必要がある。ケータイ電話は小さい。だから、ケータイの入力モードはキーボード入力とは著しく異なり、キーの数が二桁弱しかない。ひとつのキーに対して複数の先頭文字があてはめられている。入力する文字を探し当てるまで、同じキーを複数回押さなければならないこともまれではない。煩雑さを無くするため、入力機能には豊富な支援ツールが用意されており、一度入力された言葉が句単位で、かつ使用頻度によって表示されるものが大半のケータイには標準装備されている¹²。

声の文化の認識形態は記憶の制約により決定付けられていた。文字という記憶手段を持たないゆえに、話し手はその制約を克服するための戦略が自然のうちに求められて、それが有機的に認識、思考として備わってきた。記憶による制約はあくまで話し手側に位置付けられるものであった。電子コミュニケーションの世界では、何ギガという情報をわずか数平方センチメートルのチップに蓄えることができ、記憶の制約は皆無に等しい。ところが、ケータイ電話は違った形で新たな記憶上の制約をユーザーにもたらしめている。それは情報表示量（文字数）の制約で、これが主になって新たな声の文化が作り出されている。以降、このような記憶面での制約を踏まえ、いかにケータイ小説が声の文化への回帰を実現させたかを論じていくことにする。

ケータイ小説にみる声の文化への回帰

ケータイ電話の情報表示量には制約がある。ケータイ画面に一時点で表示できる文字数は100字¹³でユーザーはセグメントごとに100字の小説を読んでいくため、理想的なスタイルがケータイ表示可能文字数として通常みなされるようになる。このような表示上の制約により、ケータイ小説の最大の特徴が生まれた。それは、短文の使用である。1画面に表示できる文字数が少なければ、複文や長文はリーダビリティを減少させる。できるだけ短い文章で書き続けるスタイルが適している。この性質を主に、ケータイ小説と声の文化の特徴を比較してまとめてみたのが表2である。

表2 ケータイ小説と声の文化

項目	声の文化	ケータイ小説
制約	話し手の記憶	表示可能文字数 (1画面あたり)
文章特性	短文、単文	短文
スタイル	累加的	改行(50～100字以内)
	人間的な生活世界への密着	独白、会話体
	累積的	語彙の乏しさ
	闘技的なトーン	テーマ、ワンパターン
	感情移入的	無名の著者、主人公への感情的移入のしやすさ

短文の使用は、声の文化の累加的という特徴と通じるものがある。累加的でない文字の文化によって影響を受けた聖書の例では、文章の構成が複合的になることがあげられている。声の文化の影響をより多く受けた作品では、文章構成が単文で、必然的に短く、文頭には「そして」(and)という接続詞

が使用されることが多い。累加的というスタイル上の特徴として、ケータイ小説でみると、改行の頻度があげられよう。ケータイ小説では、システムの制約により 50～100 字以内で改行が共通的におこなわれている¹⁴。

シンプルなスタイルは、何も文章の長さや改行に限って言えることではない。登場人物にしても平均 4 名以内に設定し、情景を描写するにあたっては、とにかくシンプルなもの¹⁵を追求していこうとする傾向にある¹⁶。またその形式をみれば、まるで独白や会話で成り立っているとしても過言ではない。ケータイ小説の構成は、小説というよりはむしろシナリオや漫画に近いことが指摘されている¹⁷。独白や会話で成り立っているとは、声の文化の人間的な生活世界への密着と大いに関連している。我々の生活行動は主に会話から成り立っている。ひとりの時は独白もあろう。もちろん、スピーチやプレゼンテーションといった場面では、基本的に独白という形式がとられる。生活世界はあくまで会話のみから成り立っている。それこそ情景の描写というものはありえない。人々が目にし、耳にしたものは各人の中で解釈され、あえて明言化されないのが常である。日常生活により近くにあるためには、シンプルな形式が最も自然な選択となろう¹⁸。

語彙が乏しいという特徴は、声の文化における累積的（非分析的）な特徴に相通するものがある。累積的とは、換言すればきまり文句の使用である。「王女」に対して「美しい王女」、「兵士」に対して「勇敢な兵士」と必ず表現されるように、ある一定の表現的関連性が決まっていて状況に応じた修飾を避ける傾向にある。これは記憶手段を持たない声の文化からくる特徴で、結果的に使用語彙は乏しくなっていくことが結論付けられる。

ケータイ小説「デジタルな民俗説話」では大半の読者が 10～30 代の若年層であり、本に親しんでいない読者を想定しているため、従来からのペーパー小説と比較すると使用語彙の乏しさは大きな特徴となっている。著者が若者であるという前提から考えると、語彙の乏しさは予想されていた事実で

はある。むしろここで問題とすべきなのは語彙の乏しさということに対しての批判ではなく、オングが声の文化に対して心理的力学の観点から特徴を列挙しているごとく、ケータイ小説がもたらす心理的力学の特徴を分類し、声の文化に類似するものであるかを分析することであろう。語彙の乏しさで言いまとめられる表面的な特徴ではなく、どのような観点で語彙が乏しいのか、そしてその乏しさは声の文化への回帰を少しでも指し示すような何かであるか、という点にある。声の文化の特徴に照らし合わせたケータイ小説の使用語彙を表3にまとめてみた。

表3 ケータイ小説の使用語彙分析

冗長表現	「同じ血が通ってて、同じ親から産まれて、同じ物食べて、同じ生活してたんだよ。」(上 009)
	「真っ赤になって」、「顔を赤くして」、「赤い顔を隠している……耳が赤い」(下 105)
非分析的 (冗長表現)	「何も聞こえない静かな世界」(上 053)
	「涙でしょっぱい塩味のキス」(上 056)
	「太陽はすっかり地平線に沈んでしまい、暗くなっている」(上 066)
	「やがて大きな病院が見えてきた。沙良のいる総合病院」(下 069)
	「大好きな甘いチョコレートのように」(下 250)
非分析的	「可愛い笑顔」(上 061)
	「浴衣を着た可愛い姿」(下 103)
	「アタシの大好きなショップの包み」(下 159)
	「大好きなポテトをつまみながら」(下 172)
	「マジでかっこいいのお♪」(下 187)
非分析的 (日常密着)	「高校の近くのマックに」(下 171)
	「3人は近くのケーキ屋に向かって、歩き始める」(下 246)

その結果を踏まえて結論付けができるのは、ケータイ小説における使用語彙の特徴は非分析的という声の文化の特徴に留まらず、冗長性、日常生活への密着という心理的力学を示す、いくつかの事項が明らかにみられることである。

テーマの扱い方では、ケータイ小説が「偉大なワンパターン」と称せられるほどワンパターンに満ちた結末となっている。ワンパターンの結末に至らしめているのはテーマそのものであり、「かなわない恋、恋人の死」といった悲劇や「レイプ、妊娠中絶」のような刺激的なものがベストセラーとなり、多くの若者の心をつかんで離さない。声の文化との対比で考えると、「闘技的なトーン」に何らかの関わりがあると思われる。これは競争的というだけではなく、オングの説明によれば物理的な行為の賞賛、ケータイ小説で言えば、「レイプ」、「妊娠中絶」、「死」といった現象にその一例が見られる。声の文化では暴力の熱狂的な叙述が口承物語の特徴となっており、昔話の場面は幼児に聞かせられないほど悲惨で暴力的な内容が描写されている点に気づいたことがあるだろう。古典的な物語が多くの悲劇を生んだのも、これらケータイ小説の中でもベストセラーものの中に悲劇が位置付けられる。悲劇のヒーロー、ヒロインには感情移入しやすいよう工夫が凝らされており、多くのケータイ小説がいわゆる自叙伝風にしがっているのはそのためである。ケータイ小説の作者は、無名の素人であるケースがほとんどで、著者との心理的距離もまさに近くなっていることも、感情移入しやすい原因ではないだろうか。

最後に再びスタイルの話題に戻って考えると、ペーパー小説と比べた際のケータイ小説の特徴に横書きがあげられる。小説というジャンルで、しかもペーパーの世界では横書きはほぼ考えられないに等しい。縦書きから横書きへという動きはある一部の分野で見られるものの（大学の教科書¹⁹、オンライン新聞²⁰）、それにしてもあくまで一部のジャンルやメディアに限られている。文芸の先端をいく小説は、ほぼ皆無に等しいほど縦書きが横行してい

る。なおここで注意が必要なのは技術的な規範であろう。コンピューターの登場により横書きの文書は圧倒的に増えた。Webを可能にしたhtml、ブログ、ケータイメール、そしてケータイ小説といった媒体がすべて横書きとなっている。ペーパー小説が雑誌連載、単行本、文庫本という出版の流れを辿ると同様、ケータイ小説はケータイ配信、単行本という流れでペーパー小説としても販売に広く貢献している。ペーパーになっても実は横書きが採用され、これなどは文芸作品の分野に新たなスタイル旋風を巻き起こしており、新たなスタイル創造の契機ともなっていよう。横書き、縦書きの問題は日本語特有であり、本論では誌面に限りがあるので今後の検討課題としたい²¹。

ケータイ小説の第二の声の文化への回帰

以上、ケータイ小説が「デジタルの民俗説話」とみなせる様々な背景を、オングの声の文化の特徴に照らし合わせながら考察してきた。それによると、第二の声の文化の特徴を増徴するのではなく、スタイル的に見れば、むしろ声の文化への回帰を果たしている姿が見て取れた。それでは、スタイル以外の心理的力学としてケータイ小説と第二の声の文化の特徴との関係はどのようなものであろうか。本論の結論をまず述べておくと、ケータイ小説はスタイル的には声の文化の残滓が明確に認められるものの、著者と読者というマクロな観点に立って分析をすると、むしろ第二の声の文化の特徴を促進させる力を持つということである。つまり、一次(primary)にせよ、二次(secondary)にせよ、いずれも声への回帰であることを結論付ける。それには、文字(印刷)の代表であるペーパー小説と、本論でのテーマであるケータイ小説の作られ方を比較する必要がある。

ペーパー小説は、著者、読者、出版社といった関係者が常に分離して作業している。しかもそれらを介在するメディアである書物は、印刷所の作業工程を経ないまでは実在しない。印刷所を経由してはじめて手にできる書物が

誕生する。それまではワープロ、手書き原稿といった、最終成果物とはまた別のものを介在して作業が進められる。一方、ケータイ小説では、書き手、読み手がほぼ共通するスペースにて、それぞれの作業をおこないながらケータイ小説とかかわっている点があげられる。書き手はケータイを使って文章を入力する。読み手もケータイを使い作品を鑑賞する。そして両者を仲介している配信サイトも同じくケータイのサイトなのである。さらに、ケータイ小説の登場人物もケータイメールや電話を頻繁に利用する。ストーリーの中にケータイ利用の場面が頻繁に登場するのは、若者間のコミュニケーションモードにいかにも深くケータイ電話の使用が入り込んでいるかの証だけではなく、ケータイ電話を登場させることで、主人公がいかにもすぐそこでやりとりをしているかのような錯覚を読者に抱かせるための効果をも狙っているかのようである²²。また、そこまで意図的ではないにせよ、ひとつのケータイ空間を共有することで同一ケータイコミュニティの一部として自分を同化させる。そのような同一化がおこなわれれば、ストーリーの中の主人公に対して強い感情移入が図られるのはケータイ小説のひとつの強みである。

そのひとつの理由として、ペーパー小説に比べケータイ小説の作られ方が読者主体になっていることがあげられる。それはケータイ小説の購買方法にとってみることができる。好きなジャンル、読みきりの時間を入力するだけで、自分に合った作品を検索できる機能があるのは、まさにカスタマイズが規範となっているユーザー（読者）への最善のサービスとなる。

読者による感情移入をはじめ、ケータイ小説がいかにも第二の声の文化の特徴をかもし出しているかについて、『赤い糸』上下巻ともに、いわゆる従来の小説で言うところの解説として沖縄在住インディーズ・バンド、HYのヴォーカリスト仲宋根のコメントを分析する。長くなるが重要な記述なので、以下転載する²³。

「この小説を読み始めて4時間。朝の7:30です。

私が小説の中に入れたとしたら、芽衣と同じように眠たい目をこすり嫌々ながら布団から起きている時間帯かな。読めば読むほど、自分の恋愛と重なる所があって……、芽衣のしてきた恋が悲し過ぎるのか、あるいは芽衣が私自身と似ているのか、今の時点で私の気持ちを表すとしたら、苦しい……かな。

芽衣が好きな人と電話をするシーンを読めば、私も私の愛する人に電話をしてしまったり、アックんととの関係を行ったり来たりしている所を読めば、昔、自分がしてきた事を思い出したり、親が喧嘩するシーンでさえ似ているって思えて」(上巻)

「今、全部読み終えて初めて私とこの本が出会った事を運命だと感じてしまいました。

言葉一つ一つが私の心に突き刺さりその言葉は私が友達に言ってきた言葉だったり愛しい人に思ってきた感情だったり……。ラストにいくにあたって私は自分で書いた本じゃないかな!?って思えた程でした。

主人公はたまたま芽衣ただだけ……。

これは、いくつも恋をしてきた人なら誰だっにくぎづけになるような芽衣の話であって私の話。

フィクションであって本当の話でもある私の本。

そんな風に一言では言い表す事が出来ナイ感情を読み終えた今、私は感じています」(下巻)

ここに転載したコメントはまさにオングの第二の声の文化が想起されるため、再度ここに引用しておきたい。「そのなかに人びとが参加して一体化するという神秘性を持ち、共有的な感覚をはぐくみ、現在の瞬間を重んじ、さらには、きまり文句を用いさえするのである」(オング、1991年、279ページ)。「そのなかに人びとが参加して一体化するという神秘性を持ち」とは、まさに仲宗根の発言に見て取れないだろうか。「この小説を読み始めて4時間。朝の7:30です」。従来の小説に対する解説では、「ページを捲る手が止まらない」とか「夜通し読み進めた」といった感想はよく目にするが、「朝の7:30です」と時刻を明確に提示するコメントはまれであろう。これは、ケータイ小説の一読者としての解説者が、オングの言う「現在の瞬間を重んずる」からではないかと推察する。そのために、読者がこの文をいつ読もうが解説する側としては問題なく、とにかく現在の時刻は7:30なのである。「自分の恋愛と重なる所があって」から続く一連の描写に関しては、著者や登場人物と読者との「一体化」して、「そのなかの人びとと参加」しているという幻像さえ浮かび上がってくる。「神秘性」という言葉に代表されるように、そして、仲宗根の言葉では「本を読み終えるころには、自分が書いている気分にさえなった」という感想に見事代弁されている。さらに、「主人公はたまたま芽衣だっただけ」、「私の話」、「フィクションであって本当の話でもある私の話」という段に至っては、著書『赤い糸』が言ってみれば「私の本」であって、そうでなくとも、「私の話」なのであるという、「共有的な感覚をはぐくんでいる」姿がケータイ小説の影響として見て取ることができよう。「きまり文句」として具体的な例をあげるとすれば、それは仲宗根の文章で「本じゃナイかな!」と「出来ナイ」の「ない」の両方ともにカタカナ表記となっている点である。本文中でも、「忘れ物、ナシ!」(下137)といった風に「なし」がカタカナ表記をとっているケースが複数個所みられる。それは、もちろん、文章スタイルの効果にもよるが、ケータイ電話というメディアを使っ

た、著者と読者がともにその読み書きという作業を同じツールでおこなうという読み書き配信のマルチ方向にて同様のスペースを共有できるメディアが成しえたと言っても過言ではないだろう。

結論

ケータイ電話に代表される技術を習得するには学習曲線がある。一度効率化をもたらす機能を使いこなし、かつそれを有用と思ったユーザーの中には、ケータイこそが今の時代にフィットする、いわゆるワープロ機能を提供してくれることを発見し、新しい使用方法を編み出した。ケータイメールを書くことに慣れた人々がケータイを使って書き物を配信する、いわゆる「ケータイ小説」である。読者もケータイを使って楽しむのだが、予期せぬ現象として、ケータイでしか読まれなかったものが、今では紙ベースとなり従来の書籍として書店の新刊コーナーに登場するようにもなった。単なる話題性を持っているためではなく、ケータイ小説という形態だからこそ読みやすく感情移入できる。ケータイ小説の特徴は、第二の声の文化にある思考形態からすれば受け入れやすいコミュニケーションモードによるものであり、これを分析することで第二の声の文化の特徴がさらに明らかになるであろう。

電子メディアに介在され、かつ声の文化への回帰という特徴を有した第二の声の文化であるが、オングの紹介した時点における状況とはかなりの進展を果たした現在、第二の声の文化が声の文化だけではなく、文字の文化への回帰をも遂げている様子を日本のケータイ小説を題材に考察してきた。また、オングの採用した縦断的な研究はコミュニケーション学にはあまりその例を見ないため、これまで研究の主流であった横断的な視点による分析に対して、人類の歴史を縦断的に探る視点が加わることにより、広い意味で人間コミュニケーション研究が意義深いものになる。

本論で分析の対象としたのは書籍化されたケータイ小説であり、その点で

言えば、ケータイ独自の特殊性が分析の対象から欠如していたのは指摘を待たない。また、作品はベストセラー入りしたものとは言え、ひとりの作家による上下巻でひとつの作品でしかない。これらの点を補っていくため、今後はケータイ・コミュニケーションに代表される第 1.5 の声の文化とも言える、声の文化の特徴に対する分析がメディア研究において進展することが求められている。

参考文献

石原千秋『ケータイ小説は文学か』ちくま書房 2008.

伊東寿朗『ケータイ小説活字革命論 新世代へのマーケティング術』角川SSコミュニケーションズ 2008.

W-J・オング『声の文化と文字の文化』桜井直文、林正寛、糟谷啓介訳 藤原書店 1991.

佐藤憲一「ケータイ文化 メール感覚で“10分小説”」読売新聞 2006年7月11日

杉浦由美子『ケータイ小説のリアル』中公公論新社 2008.

鈴木謙介「ケータイ小説 偉大なマンネリ 現代の民俗説話」読売新聞、19、2007年5月9日

小坂貴志「バフチン-ヴィゴツキーの理論的相互作用-オレオレ詐欺を対話的に読み解く」、『ことばと人間』立教大学言語人文紀要、2005、vol.7、pp.61-80.

日本記号学会編『ケータイ研究の最前線』慶應義塾大学出版会 2005.

速水健朗『ケータイ小説的 “再ヤンキー化” 時代の少女たち』原書房 2008.

本田透『なぜケータイ小説は売れるのか』ソフトバンク クリエイティブ 2008.

メイ『赤い糸』上下巻、ゴマブックス

吉見俊哉『メディア文化論』 有斐閣 2004.

吉田悟美一『ケータイ小説がウケる理由』 毎日コミュニケーションズ
2008.

Marshall McLuhan (1964). *Understanding media: the extension of man*. The MIT PRESS.

Walter J. Ong (1982). *Orality & literacy: the technologizing of the word*. Routledge.

註

- 1 National Communication Association では Communication and Technology という分科会がある。
- 2 Marshall McLuhan (1964). *Understanding media: the extension of man*. The MIT PRESS.
- 3 W-J・オング『声の文化と文字の文化』 桜井直文、林正寛、糟谷啓介訳、藤原書店、1991年。
- 4 「携帯」、「ケイタイ」、「ケータイ」と表記がわかれているが、本論ではケータイ小説として登場する際に共通して使用されることが多くなっている「ケータイ」を採用した。
- 5 煩雑さをなくすため、出典原書のページ数は省略した。詳細は、Walter J. Ong (1982). *Orality & literacy: the technologizing of the word*. Routledge.
- 6 ここで誤解してはならないのは、すでに書面言語による影響が社会全体に浸透しているため、さきほど列記した声の文化の特徴へ完全に逆戻りするとは限らない。幾ばくかの特徴に関しては多少の逆行的な動きを見せるものの、書面言語の洗礼を受けた文明は声の文化そのものへの回帰は果たさない。
- 7 小坂（2005）は、現代社会を対話が高度に発達した社会であるととら

え、それとケータイ使用を関連させながら、オレオレ詐欺の加害者がいかに被害者の対話的心理をうまくとらえているかを分析した。日本記号学会編『ケータイ研究の最前線』慶應義塾大学出版会、2005. には、多角的な視点からのケータイ分析について掲載されている。

- 8 携帯電話の契約件数は9200万件を超える（「ケータイ文化」読売新聞2006年7月11日）。
- 9 ケータイ小説との対比で、本論では従来の書籍を「ペーパー小説」と呼ぶ。著者の造語である。
- 10 『赤い糸』は、主人公アタシ（芽衣）が中学から高校にかけて体験した内容についてのフィクションである。実の家族ではない身の上、3回に渡る恋愛、失恋、レイプ、自殺未遂、薬物、セックスといったセンセーショナルな出来事が巻き起こる中、芽衣が成長していく過程を第一人称で語っている。本来だと、携帯電話を使つての作品分析が妥当なのだが、記録保持性、検索性を鑑みて、本論の調査に当たって書籍化された作品を参考にしている。
- 11 正高信男『ケータイを持ったサル:「人間らしさの崩壊」』中央公論新社、2003年
- 12 ケータイ電話の入力支援ツールは、後述する「きまり文句」の使用を増加させる一因となったのは言うまでもないだろう。
- 13 ケータイ小説が書籍化される際のサイズ規範は、現在のところ24文字x24行である。これは単行本（本によって様々だが、45文字x20行）とも文庫本（38文字x16行）とも異なっている。
- 14 改行に関しては、ペーパー小説も徐々に改行の頻度が増えているように思われる。ケータイ小説への批判と同様これにしても、文芸作品らしく好ましいスタイルではないとする声の一部の間にあがっている。文芸作品の質を向上させ、そのためのスタイル的な逸脱を許さない文芸者集団の

偏見なのであろうか。それに関しては別途の機会に譲りたい。横山秀夫は改行の頻度が高い作家として知られている。改行だけでなく、会話が連続するページも多く登場する。『震度0』（朝日新聞社、2005年）では、見開きページ（40～41ページ）がすべて会話で、ページ内でも34回連続、会話という箇所も見られる。

- 15 『赤い糸』では、「アックンの家は、とても綺麗だった。マンションだけど、アタシが住んでいるマンションより広くて、家具もアンティークのお洒落な物ばかり」（上067）という情景描写があるが、ほかの場面と比べるとそれでもまわりの情景について描写がなされている箇所を抜粋してみた。「綺麗」、「広くて」、「アンティーク」、「お洒落」といった、通り一辺倒な表現のオンパレードである。
- 16 ケータイ小説の女王といわれる内藤みかの方法論である（「ケータイ文化」読売新聞2006年7月11日）。
- 17 会話によってストーリーが進むことは、まさにシナリオに近い構成としての特徴が表れている。『赤い糸』でも会話が連続する場面が多々見られ、特徴的なスタイルとして「そっか」、「はあい!」、「……ホント?」、「……」、「うん……」、「えっ?」といった極端に短い、つなぎ言葉からひとつの発話が構成される会話である。発話の単位ごとに会話のターンが正確に記述されるのは、会話分析による会話の書き起こしを想起させるものがあるろう。
- 18 日常生活に密着した表現のパターンとして、『赤い糸』では「高校の近くのマックに」（下171）、「3人は近くのケーキ屋に向かって、歩き始める」（下246）といった、物理的な距離が近接している場面が頻繁に使用されている。
- 19 東大教養学部のテキストとして、異例のベストセラーとなった『知の』シリーズは横書きとなっている。
- 20 大手をはじめ、地方においても、オンライン新聞はすべて横書きが規

範となっている。これはhtml文書に関して全般的に言えることであろう。

- 21 書籍化された『赤い糸』は文字が赤で印字されている。黒が規範である文芸書に対抗するかのような赤だが、これはタイトルの『赤い糸』を象徴していることによる。一方、既存のスタイルとの衝突により新たなジャンルが創出されるというバフチンのジャンル論に通じるものがあるが、これに関する論議は別の機会に譲りたい。
- 22 従来のペーパー小説でも、主人公と経歴が似ていたり、同じような境遇にあたりする読者がその主人公にうまく感情移入できるようなケースであると考えられる。
- 23 改行そのほかのスタイルについても参考となるよう、原書のスタイルのまま掲載している。